

## 早稲田大学

### メディアネットワークセンター

都内の中心に位置し、5万人の学生を擁するマンモス私立大学として知られる早稲田大学。最近のネットワーク施設の拡充には目を見張るものがある。今回は、学内のネットワーク化を推し進めている早稲田大学メディアネットワークセンターを訪ね、最近公開した電子博物館プロトタイプの研究を中心に、早稲田大学の大学教育とインターネットとのかわりをうかがった。



URL <http://www.waseda.ac.jp/>

早稲田大学プロフィール  
所在地  
東京都新宿区早稲田戸塚町1-104  
沿革  
1882年、大隈重信によって創設された東京専門学校が始まり、自由民権運動の最中、学問の独立という建学の理念を掲げ、日本の近代化を推し進める人材を多く輩出した。  
学生数5万人、8系統9学部を擁する総合大学となった現在、新たな社会に対応すべく、同大学内ではさまざまな改革が進んでいる。  
ネットワーク環境  
キャンパス内には、全学を結ぶ学内総合ネットワークであるWINDが張り巡らされ、全学内の研究室や教室を中心に約4000の情報コンセントを有している。西早稲田や戸山、大久保などの主要なキャンパスは、相互に100Mbpsで接続され、遠隔地の所沢キャンパスの1.5Mbpsで接続されている。また、学生や教職員による学外からのアクセス経路も用意されている。学生は申請すればアカウントを持つことができる。  
学外へは、学術ネットワークであるWIDEやIMnetなどを通じて接続されている。

早稲田大学メディアネットワークセンター (MNC)

メディアネットワークセンターのホームページ。  
URL <http://www.waseda.ac.jp/mnc/index-j.html>

メディアネットワークセンターは、早稲田大学でも最近できた機関ですが、いつどのような目的で発足したのですか

早稲田大学の情報関連組織は、研究教育系と業務系、学術情報系の3つに分かれていました。これらを、情報化推進を目的にして1つにまとめ、1996年6月に発足したのがメディアネットワークセンター(MNC)です。

現在、早稲田大学では、1996年から3年ごとに3期間に分けて情報化を推進しています。最初の3年間は、インフラの整備ということで、キーワードは「5万人が使える環境整備」です。この5万人というのは、早稲田大学にかかわる人すべてという意味です。次の3年間は、「大学の研究教育のオープン化」です。そして、最後の3年間はそういったインフラや教育システムを受けて早稲田大学のありかたが本当の意味での世界の大学、グローバルな早稲田大学になっていく。こういった筋書きを描いて、MNCはその中心となって活動しています。

そのような筋書きのなかで、申請してきたすべての学生にアカウントを発行しています。今年の新入生には、全員にアカウントを発行しており、入学時のガイダンスはずいぶん盛況でした。今では、学内でアカウントを持つ学生数は3万人を超えています。ちょっとしたプロバイダー並みですね(笑)。

電子博物館のプロトタイプを発表されましたが、その研究を始めた経緯を教えてください。

情報推進化の筋書きの中で、2期目の目標は「研究教育のオープン化」としています。その計画を進めるには、よい事例を示したうえで、どんな先生がどんな中身を、どんな形で授業や研究に使いたいのかという話を受けながら計画を進める必要があります。そこで、よい事例としてあげられそうなのが図書館と博物資料の電子化なのです。

早稲田大学の図書館の所蔵している文献は世界に誇れるもので、そのほとんどを取



理工学部情報学科教授の筒捷彦氏(右)メディアネットワークセンターのプロダクト担当マネージャーの黒田学氏。



夏休み中にもかかわらず、大盛況のコンピュータ室。



電子博物館のデータを作成しているところ。ビデオや録音機器などさまざまな機材が並ぶ。

夏休み中に、ネットワークを強化すべく工事が行われていた。

めた早稲田の図書館データベースは日本を代表するものなのですが、外部とのデータのやり取りに何かと制約があります。これを、もっとオープンにした、文献そのものも閲覧できる新しい電子図書館を作ろうという計画を検討しています。

もう1つの博物資料ですが、早稲田大にある膨大な量の資料を陳列できる博物館を作ろうとすれば巨大な建物が必要になってしまいます。

そこで、博物資料を電子化して、コンピュータで自由に検索や閲覧ができるようにして授業や研究に使えるようにして、実際の資料は小さなスペースで少しずつ展示できるようにするというのが電子博物館の計画でした。

このような計画を検討しているなか、文学部のほうでも自分たちの持っている博物資料を電子化して授業に使えるようにならないかと盛り上がっていて、それに関するプロジェクトが文学部に発足していました。そこからぜひ電子化を始めてみたいという提案がMNCにきたのです。

それが、われわれがやろうとしている電子博物館の話とぴったりと目標が合うということで、スタートしたのです。

 電子博物館のコンテンツはどのように作成しているのですか。

博物館の資料そのものや、貴重でデリケートな資料を取り扱うノウハウは当然、文学部にあります。しかし、デジタル化するノウハウはこちらにあります。

ですから、文学部で提供してくる博物資料をどうデジタル化すれば効果的なものになるかをMNCで検討します。その結果、共同研究しているNTTソフトウェア研究所とMNCが資料をデジタル化するのですが、その実作業にはコンピュータ技術だけではだめで、文学部の研究者の持つ資料の取り扱いのノウハウが必要になるのが分かりました。

このように、お互いの持っているところをうまく使って作成しています。このプロトタイプから、電子博物館を作るための共通方式がで

きあがれば、他の先生や学部も独自の電子博物館を作っていけるというわけです。

 ネットワーク化やオープン化が進んでいくと、大学はどのように変わっていくのでしょうか

今までの講義のような知識を与えることは、ネットワークにまかせればよくなるでしょう。講義の資料を見るには、ウェブサイトにアクセスすればいいわけで、実際に学校に来る必要はないのですから。

そのうえで、メインの授業は、教授と考えたリディスカッションしたり発表したりするということのような少人数のゼミのような形になっていくかもしれません。また、大学が都心にあるというメリットを生かして、学生だけでなく社会人もそういった少人数の授業に参加できるという形になるかもしれませんね。



学術データベース。早稲田大学で行われている研究を公開していく予定。



電子博物館のページ。研究内容をいかにデジタル化するかに苦労したという。



## [インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D(株式会社インプレスから分割)が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

<http://i.impressRD.jp/bn>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接のおよび間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先

**株式会社インプレスR&D**

All-in-One INTERNET magazine 編集部

[im-info@impress.co.jp](mailto:im-info@impress.co.jp)